

《研究ノート》

アンドルー・マーヴェル作「ホラス
風オード」の解釈をめぐって

石井正之助

一

アンドルー・マーヴェル(Andrew Marvell, 1621—78)の「ホラス風オード」(An Horatian Ode upon Cromwell's Return from Ireland)が作られたのは、ほぼ一六五〇年の夏の初めと推定される。前年一月チャールズ一世は断頭台上に刑死し、イギリス国民に大きなショックを与えたが、共和政府の任を受けた後の護民官クロムウェル(Oliver Cromwell, 1599—1658)は、同年八月アイルランド平定に向い、翌五〇年五月帰還、さらに七月にはスコットランドへの進撃を始めることとなる。マーヴェルはこの頃二十九歳、ケムブリッジのトリニティ学寮に学んで後、四二年から約四年にわたってオランダ、フランス、イタリー、スペインを旅して帰国した。当時、彼が王党派的傾向を持っていたらしいことはヘイスチングズ卿(Lord

Hastings, 1630—49)を悼むエレジーを作り、リチャード・ラヴレイス(Richard Lovelace, 1618—58)の詩集の巻頭に賛辞を寄せていることなどから察せられる。さらにこの「オード」を書いて約半年の後、五年の初めには、かつてクロムウェルの前任者として議会軍の指揮官であったフェアファックス卿(Lord Fairfax, 1612—71)の娘メアリの家庭教師となつて、そのナンアップルトンの館に二年の歳月を過すこととなる。

二

ここにその解釈の問題を取上げようとする「オード」は三つの四行連(弱強四歩格二行と同三歩格二行、a a b bと押韻)を持つ一二〇行の詩である。紙幅の都合で原詩の引用に代えて大意を記しておく。

「今は戦いの時、名を揚げようとする進取の気象の若者は、詩をすて学芸をなげうって物具を着けるべき時である。(一連—二連)活動家のクロムウェルは安穩な生活を送ることをいさぎよしとせず、戦いに加わつてその運命を開拓しようとする。大空に閃く電光のように、雲をつんざき、敵も味方もひとしく懼伏せしめながらその破壊力をふるい、王の頭をも粉砕した。(三—六)怒れる天の焰に抗するのは狂気の沙汰である。しかも人の力も決して小さいものではなかった。つつましい田園の生活、ただ果樹の育成を至上の務めのように暮すはずの人が、怠ることを知らぬ勇を鼓して高きにのぼり、時の大いなる業を打ち砕き、旧い王国を新しい鑄型に入

れたのである。(七一九)正義が運命に不満を訴え、古来の權利を空しく抗弁しようと、それらは持つ人の力の強弱により支えられあるいは失われるもの。空虚を嫌う自然は、また二者の一点における共存をも許さず、より偉大な精神の前に所を譲るのが法である。(二〇—二一)内戦に際してこの人の与えた損害は最も大きく、この人の策の巧みさはハムブトンの交渉にもうかがえる。遂にチャールズは自らケアリスブルックにのがれ、やがて断頭台にその歩を運ぶこととなった。兵士たちは血によごれたその手をたいたが、王の死はまことに従容、斧の刃をみつめ、静かにその首をたれた。(二二—一六)かくして運命の定めた権力は確立された。あたかも昔ローマのジュピター神殿の建造にあたり、血にまみれた首が地中から掘りおこされて人々を驚かせながら、やがて帝国の発展を予言する吉兆となったように。(一七一—一八)今やアイルランドは一年にして平定され、この人の威に服したが、権力の座についておごらず、共和政府の命に従順であって、このような人こそ支配者に適した人である。(一九—二二)その功もおのれの名声に向けず、剣によって得た戦利品も公のものとして差しだす態度は、鷹匠の意のままに動く鷹のようである。(二二—二四)この人の勝利によってわが国が期して待つべきもの、他の国々が恐れるものは明らかである。ゴールに対するシーザー、イタリーに対するハンニバルの如く、自由を知らぬ国々は危機を迎えるであらう。(二五—二六)無節操なスコットランド人も身をおく所なく恐れおののき、

この人の追求の目ののがれうるものは幸である。(二七—二八)しかし、おんみ戦と運命の子よ、いざ進め。最後の一撃のために剣を収めるな。その剣は敵の兵力のみならず、暗い夜の魔性のものたちをも脅かさねばならぬのだ。力を獲得した同じ技がその力を維持する必要がある。(二九—三〇)「

三

一見クロムウェルを賞賛すると思われるこの詩は、成立後王党派の間にも流布した形跡がある。しかし一六八一年刊のマーヴェル詩集に収められなかったことは、王政復古という事情の変化にふさわしくない内容を持つものと考えられたためであらう。前述のようにマーヴェルの政治的信条は一時王党派に傾くと見えながら、やがて一六五三年にはクロムウェルのラテン語秘書として推薦を受けるほど議党派の旗幟を鮮明にする。この「オード」は二つの相反する立場のいずれに立つものであろうか。この点について従来さまざまな説が述べられてきた。果して作者は徹頭徹尾クロムウェルを支持するのか。あるいは、王党派としてチャールズに寄せる同情を、偽装したクロムウェル賛美に託したのか。あるいはまた、チャールズに同情をそそぎつつも、クロムウェルの手腕に敬服し、その所業を是非々々の立場で批判する中立的な姿勢をとるべきか。

この作品をもっぱら王党派的なチャールズ弁護とする見方は、今日ではまず跡を絶たうと言つてよいであらう。なるほどこの悲劇の王の、死に臨んでの従容たる態度をうつつ次の二連

(一五一一六)

*He nothing common did or mean
Upon that memorable Scene:*

But with his keener Eye

The Axes edge did try:

Nor call'd the Gods with vulgar spite

To vindicate his helpless Right,

But bow'd his comely Head,

Down as upon a Bed.

(87) 研究ノート

は、この「オード」をマールヴェルの、さらにまた英詩史上の傑作の一つに数えさせる見事な詩才の発露であるが、冒頭から積み重ねられてきたクロムウェルの疾風迅雷のような偉業の叙述——自然力の具現としてのクロムウェルというテーゼに対して措定されるアンチテーゼとしての役割は、この二連に凝集する力と美をまっぴらめて可能だったのだと言えよう。従ってクロムウェルに代えてチャールズを主役に昇格させるに足るものはこの「オード」には含まれていない。一步を譲って、チャールズ亡く、共和体制の毎日に確立されていく状勢のもとでの偽装王制弁護にとるにしても、その前後に配されたクロムウェル賞賛の部分とのアンバランスは、マールヴェルの詩人としての力倆を考えると、許容しえない瑕疵をこの作品に負わせることになる。この詩にチャールズのための弁疏、専制主義を戒める反

クロムウェルの意図を汲みとろうとする試みはもはや見かけられない。

四

この詩をクロムウェルの賛辞と見るにしても、その賞賛になお二つの態度が考えられる。徹底した賛美か、そのすぐれた業績を賛えながら批判も怠らない公正なものか。この中の後者の見解、マールヴェルの政治的中立性、クロムウェル支持の消極性を読むのが、現在多くの批評家に共通の傾向と言えよう。前者は詩人が当時すでに議会派に心を寄せていたことを予想し、後者は彼が多少クロムウェルに傾きつつも王党派の色彩を完全に脱却していなかったことを予想する、と考えられそうであるが、問題はそれほど単純に割り切れるものではない。何故なら作者の政治的信念や心境は、作者自身が何らかの形で発表しているものでなければ、ただわれわれの想像によって考えられるばかりであるからである。国王処刑に反対して引退した穩健派のフェアファックス將軍の館に寄食し、抒情詩の制作に没頭していたという外面的な伝記的事実は、作者の思想的立場を証明する直接の材料とならないことは言うまでもない。

五

ここでこの作品に対する批評家の態度の主なものをいくつか瞥見してみよう。

まずマールヴェル詩集の標準版の編者マーゴリウスの見解は、

この詩の作者を穩健な立憲君主制支持者とする。詩人は国王に同情を持ちつつも、党あるいは主義よりも人を重んじ、私的野望を抱かず、運命を担いつつそれを推進していくクロムウェルに理想の政治家を見ているとするのである。

ブラッドブルックおよびトマスはその著「アンドルー・マーヴェル」の中で、この作品を詩人の「認容」(toleration)のあらわれの一つと解する。熱烈な王党派詩人ラヴレイスの友人であったマーヴェルはこの詩に見られる検討を経て議会派に左袒することを決意する、ととるのである。この詩は自然力の具現としての、非個人的に描かれたクロムウェルをテーゼとし、個性的な、人間的な威厳と麗容を備えたチャールズをアンチテーゼとし、運命に与えられた権力の保持者、非魅力的なクロムウェルの認容をジッテゼとする構成を持つという。

ブルックスの見解は、大綱においてマーゴリウスに近いが、クロムウェルに対する賞賛と非難が肩を並べ、互いに限定し互いに強めあっているとす。時にはこの詩はクロムウェルの性格の断固たる批判であつて賛辞ではないとも言切れるが、また言葉を改めてクロムウェルへの純粹な賞賛が見られるともいう。次に挙げるブッシュの批判も触れていることであるが、ブルックスの読みは鋭く深い反面、時としてある方向にそつての読み過ぎが感じられないでもない。その具体例は次節にかかげる。

ブッシュの「オード」観は、右のブルックスの批評に対する批判の形で提出される。ブッシュはブルックスの解釈を、こと

さらに語句の「悪意のある、より暗い意味」(sinister and darker meanings)を読みとろうとするものと非難する。批評家が作品の本文を重視し、純粹な批評、偏見のない分析をするとして、歴史的研究にたよらず、誤謬や歪曲の過ちを犯し、一七世紀自由主義者の作品に現代の自由主義者を読みとることとなる危険を警告する。ブルックス流の読み過ぎの弊に陥ることなしにも、この詩が温かい賞賛と冷やかな分析を併せもつ超脱的な心境でクロムウェルとチャールズを眺め、前者の長所短所をありのままに描いたものであることは読みとれる筈、とブッシュは言う。

ブルックスの読みの行き過ぎ、ブッシュの新批評嫌いを別にすれば、恐らくこの二人の有能な学者・批評家の見解の等しく指す所が一応正鵠に近い解釈と言えよう。この両者の相違点のいくつかは次節で取上げてみたい。

ラーナーは、ブラッドブルックとトマスと同じように、この詩の中に弁証法的構成を読みとろうとする。ただしラーナーの見ると対立は、古来の権利―王権の保持者チャールズと、より偉大な精神の具現者クロムウェルである。ブラッドブルックとトマスはまずクロムウェルを肯定して、チャールズをこれに対立させたが、ラーナーはチャールズを古い制度の代表者とし、クロムウェルをそれを破壊する力として対立させる。前者は作品に密着し後者は歴史を重視していると言えよう。ジッテゼはラーナーにおいても新しい共和制である。この批評家はこの詩にマルクス主義者の細部を読みとろうとする。作品の表面に

こそ現われないが、一七世紀イギリスの経済的下部構造に支えられる力による正義の観念、突然の旧い政治体制の崩壊など、もとより詩人自身そのような史観を意識して身につけていたわけではないが、当時の社会意識のある表現がここに見られるとするのである。ラーナーは、ホラス風オードという古典的な詩形式の採用に、詩人としての、すくなくもこの作品における詩人マーヴェルの、保守性を見る。むしろ行動から身を引いて、詩の制作に向ったマーヴェルは、新しい制度に対する挑戦を試みたとさえ言えよう。あらたに興る社会の姿は、古いものによって培われた洞察によつてはじめて捕えうることを彼は知っていたが、それが彼のクロムウェル観に深みを与えているとする。

比較的最近の「オード」批評のうち、ハイマンとウォラスは、いずれもこの作品を、クロムウェルの全面的肯定ととる。⁽⁶⁾ただしハイマンは、マーヴェルが現実と理想の間に立って、一種の必要悪としてクロムウェルを認めたとする。ウォラスの肯定は遙かに積極的である。彼はこの作品に、古代ローマの雄弁家たちによる政治的弁論への類似を読みとろうとする。彼によればこの詩は序論と結論の間に叙述・確認・反論の三部の構成を持ち、刑場のチャールズの姿の如きは叙述部の単なる一挿話にすぎず、この人物はクロムウェルと対立する大きな存在とは考えられないのである。

なおハイマンはこの詩をそれと前後する他のマーヴェルの作品との関連において捕え、詩人の心中の矛盾衝突の具現とする。ハイマンの解釈によれば、クロムウェルの行動の必要性は

理解しながら、具体的現実的にそれに追隨できない詩人の、せめて詩の形における是認がこの「オード」なのである。

五

以上列举したこの詩についてのさまざまな解釈は、内容・構成・形式等に関して有益な示唆を与えてくれるが、同時にまたこの作品の厚さ、その複雑な性格を立証するものとも言える。次に前述したブルックス、ブッシュの見解の相違する点を、二三取上げて検討を加えてみたい。語句の解釈の点ではこの二人のものが最も詳細かつ示唆的である。(ラーナーの語句解釈にも捨てがたい鋭さがあるが、今これに触れる余裕がない。)

ブルックスは第一連の 'The forward Youth that would appear' に用いられた 'forward' には 'high-spirited', 'ar-dent', 'properly ambitious' の意味のほかには 'presumptuous', もしくは 'pushing' の意味も考えられようという。さらにこの語が第三連の *Cromwel* にもその影を投げかけているものとする。ブッシュは、この解釈がすでにマーヴェルのクロムウェル観を色眼鏡によって見ようとするもので、この侮蔑の意味は一七世紀には普通のものでなかったという。

第三連の 'So restless Cromwel could not cease' にひびいてブルックスの読みとる 'thirst for glory' もブッシュには穿ちすぎと考えられる。

第七連の 'Tis Madness to resist or blame/The force of angry Heavens flame' にひびいてブルックスは 'クロムウェル

ルを自然力の発現と見、怒れる神の意思の代行者とは考えられないとするが、これはブッシュによれば、自己の解釈の都合のために、ことさらにマーズェルの真意に目をとじるものであるが、この点ブルックスに読みおとしがあったと見るべきであろう。

その他第九連の 'Could by industrious Valour climb' 第二〇連の 'And have, though overcome, contest' 第二一連の 'But still in the Republic's hand' の下線部(筆者)の語、第二九連の 'But thou the Wars and Fortunes Son' などについても二人の見解は一致しない。ブッシュに於れば、ブルックスは真の多義性と似非多義性との間に劃すべき一線を絶えず踏みはずし、意味の歪曲を行なっている、いわばマーズェルを一七世紀から拉し去って現代に据えたと言ふべきである。

このように見てくると、事は単にマーズェルの「オード」の解釈にとどまらない。ブルックスがブッシュに加えた反論の表題が示すように、「歴史」と「批評」の限界をどこに定めるかの問題に発展する。ともあれこの詩が、歴史的な読み方によつても十分味読するに足る含蓄を持ったものであり、新しい視点に立つ批評によつて、さらに現代の読者に訴えかける別の意味を与えられるという事は、作者の緻密な計算と合理を超えた詩的天才、それらを支える内省の深さに帰せられてよいであろう。

六

この「ホラス風オード」を書きながらマーズェルの心中に去来したのは、激動する社会の状況に対して、自分をどのよう位置づけるかの問題であらう。神によって授けられた王権も、英国民を適正な進路においていたとは思われず、国王を死に追いやった新しい力に驚異の目を向け、これを肯定する気持はありながら、なお躊躇を覚えずにはいられないマーズェル、'forward Youth' にならざれば、'Muses dear' を棄てず、'Numbers languishing' にならざるをかれ、'Tis time to leave the Books in dust' と言いつながらもそれに踏みきれなかつたマーズェル。彼の「庭園」(The Garden)の冒頭の

How vainly men themselves amaze
To win the Palm, the Oke, or Bayes;
And their uncessant Labours see
Crown'd from some single Herb or Tree.

という嘆きは、恐らくナンアブルトンの美しい自然の中に起居する彼の心に繰り返しひびいたのであらう。

行動の人クロムウエルを賛える気持のうらに、なおそれに全面的に同じきれないものを持つ彼は、胸の中の「詩」をみつめてそれを生きるために、暫く観照の生活に没頭することの必要を痛感したのではあるまいか。一六五三年、彼がヨークシアを

去ってイートンに移りクロムウェルの被後見者の教育を託され、五七年、ラテン語秘書として共和政府に職を奉じた時、彼の姿勢は定まり、もはや右顧左眄は許されなかつた。やがて王政復古後故郷ハル市選出の国会議員として憲政の擁護に献身し、風刺詩人としての活躍がはじまる。しかし彼の知的な愛らしさをこめた甘美な抒情の世界はついに再び戻ってこなかったのである。

- (1) Margoliouth, H. M., *The Poems & Letters of Andrew Marvell* (Oxford, 1927) pp. 236—8. (パーナムからの引用はこの版に依つた。)
- (2) Bradbrook, M. C. & Lloyd Thomas, M. G., *Andrew Marvell* (Cambridge 1961) pp. 72—6.
- (3) Brooks, C., "Marvell's 'Horatian Ode,'" in *English Institute Essays* (New York 1946) Ditto, "A

Note on the Limits of 'History' and the Limits of 'Criticism,'" *Sewanee Rev.*, LXI (1953).

- (4) Bush, D., "Marvell's 'Horatian Ode,'" *Sewanee Review*, LX (1952). (つれづれにママンズマンズの論文に Keast, W. R., *Seventeenth Century English Poetry* (New York, 1962) 中に再録をなす。)

(5) Lerner, L. D., "Marvell: An Horatian Ode" in Wain, J. (ed.), *Interpretations* (London, 1955).

- (6) Hyman, L. W., "Politics and Poetry in Andrew Marvell," *PMLA*, Vol. LXXIII, No. 5 (1958).
- Wallace, J. M., "Marvell's Horatian Ode," *PMLA*, Vol. LXXVII, No. 1 (1962).
- (一橋大学講師・東京学芸大学教授)